信頼　娘からの宿題⑤　伝えながら、また一歩未来へ

菅保さん夫妻＝神奈川県平塚市

00年4月、東海大学病院（神奈川県伊勢原市）の医療ミスで、長女の笑美ちゃん（当時1歳半）を亡くした菅保弘道さん(41)と文子さん(46)は、「娘の死を意味のあるものに」と医療安全のために闘い続けている。

「病院はすぐミスを認めて謝ってくれた。だから私たちは前向きに考え始めることができた」。講演で弘道さんが必ず言う言葉だ。

事故直後の謝罪と説明が卓抜だと訴える。「謝ったからといって被害者は『ああ、そうですか』なんて納得出来ない。でも後で素直に聞いた時、少しずつ理解できるようになる」

文子さんも言う。「病院がどう変わっていくかを見続けるのが、私たちの意志」。医療を少しでもよくするために、体験を伝えていくことが、娘からの「宿題」だ。

東海大学病院は笑美ちゃんの事故の日を「医療安全の日」とし、職員向けにセミナーや講演会を開いている。事故から4年目のその日、菅保さん夫妻は約800人の医師や看護師らを前に話した。終わりに文子さんは涙をこらえ、「笑美が退院する時、あんなことがあり何もお礼を言えませんでした。看護師さん、主治医の先生、リハビリの方、そのほか大勢の世話をしてくれた方、本当にありがとうございました」と言って頭を下げた。

病院では年間5千件の「ヒヤリ・ハット」事例があがる。それを月1回の検討会で議論し、必要があれば改善する。製薬会社などに表示の改良を促したこともある。

事故後のやりとりを通じ信頼するようになった元総務課長の岡山浩さん(56)に、文子さんはおとどけた表情の笑美ちゃんの写真を渡した。岡山さんは看護部長の部屋に飾った。

菅保さんらは、各地の講演会に当時の院長の谷野隆二郎さんらと参加することもある。弘道さんは、時に自分の後輩病院の患者を東海大学病院に紹介し、自身も眼科に通院する。

02年、新国を建てた。チャペルを模した造りで、壁にはステンドグラス。吹き抜けの2階には笑美ちゃんの祭壇があり、天使の羽をつけたクマのぬいぐるみが並ぶ。

今年、その「天使の家」に新しい「家族」が増えた。笑美ちゃんを失った後も「子どもを育てたい」とずっと願っていた2人は里親になり、生後まもない女の子を迎えた。いつかこの子に笑美ちゃんの話をする時が来るかもしれない。未来へ、また一歩を踏み出している。

（文・平塚史歩、写真・細川崇）

説明と謝罪　情報編　真実を語る試み、国内外で

真実説明と謝罪・七つの柱

1. 事故報告　適切な病院管理者に報告
2. 初期行動　発生24時間以内に治療責任者が患者・家族に伝える
3. 真実説明　何が起きたかを正直に伝える
4. 謝罪　過誤がない、不明の場合も遺憾の意を示す
5. 調停　話し合いによる解決を手助けする人を置く
6. 根本原因分析　第三者も交え分析、対策を実施
7. 補償

（ハーバード大学「医療事故・真実説明・謝罪マニュアル」翻訳版から）

「患者を生きる　娘からの宿題」で紹介した菅保弘道さん(41)と文子さん(46)は00年、東海大学病院（神奈川県伊勢原市）の医療ミスで娘の笑美ちゃん（当時1歳半）を亡くしたが、直後の病院側の謝罪を支えに前に歩き出せた。現在は医療の安全と同時に、万一事故が起きた場合、病院側の「説明と謝罪」がいかに大切であるか訴え続けている。

事故を隠さず、きちんと説明・謝罪しようという動きは、少しずつ広がっている。

米国では、02年に「真実説明・謝罪」方針を採用したミシガン大学病院で、訴訟・示談が年間262件から114件に減少、係争関連費用も3分の1になった。

ハーバード大学は「真実説明・謝罪マニュアル」を作成、05年に関連病院に送った。柱は七つで、特に重要なのは「すぐに真実を説明する」「謝るべきところは謝る」の2点。発生後1日以内に治療の責任者の医師が説明するのが望ましいとされる。医療者側に過誤があった事の謝罪は当然だが、過誤がなかったり不明だったりした場合も「こうしたことがあなたに起こって残念です」と遺憾の意を伝えるのが重要としている。

同様のガイドラインは、カナダや英国、オーストラリアなどでも作られている。

日本では東京大学医療政策人材養成講座の有志が「ハーバードマニュアル」を翻訳し、06年に公表した（http://www.stop-medical-accident.net/）。植岡健一・東大特任准教授(49)は「謝罪したら刑事事件になるのではないか、裁判で不利になるかもしれないと考える医療者は少なくない。しかし国内の研究でも謝罪したことが裁判の証拠とされる例はほとんどなく、逆に民事事件での軽減措置につながることもある」と指摘する。

52病院が加わる社団法人・全国社会保険協会連合会（全社連、http://www.zenshairen.or.jp/）は今春、ハーバードマニュアルの翻訳をもとに外部メンバーも加えて検討を重ね、全社連版「医療有害事象・対応指針」を作った。

裁判と違う方法で解決を探る試みも進んでいる。愛知県弁護士会などの弁護士は仲裁人として「医療ADR（裁判外紛争処理機関）」に取り組む。専門知識のある第三者が入って患者側と医療者側が話し合う。裁判に比べ時間や費用がかからず、患者・家族の負担が少ないのが利点とされる。

（平塚史歩）

信頼　娘からの宿題③　日本のモデルケースになろう

神奈川県平塚市の菅俣弘道さん(41)と文子さん(45)は00年4月、東海大学病院（伊勢原市）の医療ミスで1歳半の長女、笑美ちゃんを亡くした。司法解剖を終え、親子3人が自宅に戻ったのは、次の日の夜だった。

一睡もできないまま翌朝5時、2人は笑美ちゃんを抱いて外に出た。近所の満開の桜の木の下で、「きれいだね」と声をかけた。

通夜と告別式を終え、心に穴が開いたような2人が思い出したのは「天国の特別な子ども」の詩だった。娘は何のために生まれて来たんだろう。この死を無駄にしないために、自分たちに与えられた役割は何だろう。

「この事故があったから、これだけ医療が安全になったと言えるようになれば、娘の死が意味あるものになるのではないだろうか」

弘道さんは医療事故に詳しい弁護士や被害者を支援する市民グループと連絡を取った。話を聞き、勉強会に参加した。そして、病院はミスがあっても説明したり謝ったりせず、隠すことが多いことを知った。次々に事故が明るみに出ていたが、病院側は患者・家族に説明すらしない例も少なくなかった。

そんな中、弘道さんの目にとまったのは米国の「ペン・コルブ君事件」だった。耳鼻科の手術中、誤注射で息子を失った両親が病院の事故後の対応を評価し、示談に応じただけでなく、その病院に通い続けているという。「うちが日本のモデルケースになれるようにしよう」。それには対立するより、向き合わなければ。病院と示談の話し合いを始めた。

2人がこだわったのは「患者の声を聴き、再発防止に努める」という点だった。

事故原因となった「三方弁栓」は、医療機器製造業界が注入口の大きさが異なる国内統一規格を新たに決めた。「笑美ちゃんの事故がきっかけだった」と説明されて、菅俣さん夫妻は救われた思いがした。

文子さんは看護師に手紙を書いた。「もうご自分を責めないで下さい。どうかこれから日本の医療がどうなっていくのか一緒に見守って下さい」。簡単に許せるわけではない。でも笑美ちゃんの担当看護師として世話をしてくれた彼女への感謝も、心の中にあった。

01年4月。「事故について真心より謝罪する」「医療事故防止のために患者の声に耳を傾け真摯に努力する」という文言を含んだ示談の文書に、菅俣さん夫妻はサインした。事故からちょうど1年が過ぎようとしていた。

病院の事故調査委員会がまとめた報告書＝神奈川県平塚市

信頼　娘からの宿題④　「えみ」が見守る医療の安全

00年4月、神奈川県平塚市の菅俣弘道さん(41)の長女、笑美ちゃん（当時1歳半）が医療ミスで亡くなった東海大学病院（伊勢原市）は、直後に家族に説明して謝罪した。当時としては珍しかった。

原因究明と再発防止の取り組みも、事故の当日から始めた。

当時の院長の谷野隆三郎さん(68)は就任したばかりだった。その前年、東京都立広尾病院や横浜市立大病院で事故が相次ぎ、着任前から院内マニュアル作成の準備などを始めていた。その矢先の事故は衝撃だった。

谷野院長の指示で、内部の調査委員会が発足。委員長には堺雅人副院長(68)＝当時＝が就いた。菅俣さん夫妻との連絡は國山市郎総務課長(56)＝同＝が当たることになった。

最初の委員会で堺さんは言った。「一番は誠意。でも誠意があっても伝わらないこともある。目に見えるのはスピードと透明性だ」

カルテや聞き取りなどをもとに、委員会の報告書がまとまったのは事故後19日目。

その前文に堺さんは記した。

「社会から医療上の過ちを根絶するように絶え間ない工夫がなされることが、せめて亡き患者さんへのご供養となることを願う」

5月には、第三者による外部評価委員会もできた。弁護士や作家、市民グループ代表など9人。航空業界などで使われる分析法に基づき、組織的な事故の要因が指摘された。

一方で、再発防止に向け、事故の翌日から、原因となった医療用チューブは、点滴用と経管栄養用とをルート別に色分けをした。院内に医療安全対策室を立ち上げ、医療安全マニュアルを作成、全部署に「リスクマネジャー」を配置した。

特に力を入れたのが、インシデント・アクシデントリポートの収集と分析だった。

事故や事故につながる恐れがある「ヒヤリ・ハット」の事例を集めて分析、事故防止に生かす。どんな小さなことでも報告するようになり、笑美ちゃんの事故前は年間2千件だった件数が、5千件になった。東海大学はそれを系統分類するシステムを独自に開発し、「Error in Medicine Information」と名づけた。

頭文字を取ると「EMI」。「えみ」だ。

「笑美ちゃんが医療安全にずっと役立ってくださることを願っています」

堺さんは菅俣さん夫妻にそっと伝えた。

吹き抜けのリビングに笑美ちゃんの祭壇がある＝神奈川県平塚市

信頼　娘からの宿題①　選ばれてうちにやって来た

笑美ちゃんの話をする菅原文子さん（右）と弘道さん＝神奈川県平塚市

もうすぐ娘の10回目の誕生日がやってくる。主人公のいないその日を、菅原弘道さん（41）と文子さん（45）は、手作りのケーキを焼いて祝うつもりだ。「私たちは、医療の安全のための活動を続けているよ」と報告しながら。

柔道整復師の弘道さんが勤める病院に「ライフセラピスト」として勤務するようになったのが文子さんだった。病院の生活に彩りを添えようと活動する文子さんに弘道さんはひかれ、94年に結婚。先輩のもとで修業後、目標だった接骨院を神奈川県平塚市で開いた。

2人にはもう一つ夢があった。子どもを育てること。しかし、なかなか授からず、東海大学病院（伊勢原市）に不妊治療に通った。

1年ほど過ぎた頃、尿検査のプレートに妊娠を示す「線」が現れた。病院で改めて診断を受けた帰り道、文子さんは書店で育児雑誌を2冊買った。祈りがとても青い日だった。

妊娠7カ月目、自宅近くの産科で、「十二指腸がつながっていないかもしれない。小児外科と新生児集中治療室（NICU）がある病院に移った方がいい」と言われ、再び東海大学病院に通い始める。

34週目の検診で心音の低下が分かり、緊急帝王切開。98年9月29日、1994gの小さな赤ちゃんを2人は「笑美」と名付けた。誕生3日目に十二指腸をつなげる手術を受けたが、おっぱいで胸がはってきた文子さんは、喜びをかみしめた。

数日後、医師から笑美ちゃんがダウン症であることを知らされた。文子さんは、米国の詩人の詩を思い出した。

会議が開かれました／地球からはるか遠くで／「また次の赤ちゃん誕生の時間ですよ」／天においでになる神様に向かって天使たちは言いました／この子は特別の赤ちゃんでたくさんの愛情が必要でしょう／この子の成長はとてもゆっくりに見えるかもしれません

障害のある子と親を描いた漫画の中で紹介された「天国の特別な子ども」という詩。

どうか神様この子のためにすばらしい両親をさがしてあげてください／神様のために特別な任務をひきうけてくれるような両親を

「笑美はきっと選ばれてうちに来たんだよね」。文子さんと弘道さんは語り合った。

約2カ月後、笑美ちゃんは退院した。親子3人、新しい暮らしが始まるはずだった。

（文・平塚史彦、写真・鵜川耕樹）

信頼　娘からの宿題②　内服薬を誤って点滴チューブに

弘道さんにキスをされ、にっこりする笑美ちゃん（提供写真）

神奈川県平塚市の菅原弘道さん（41）と文子さん（45）、長女の笑美ちゃんの1人1歩の暮らしはつかの間だった。

98年2月、笑美ちゃんが勤務し、東海大学病院（伊勢原市）に向かった。検査結果は胃食道逆流による誤嚥。栄養をとる「Gリチューブ」が鼻から十二指腸まで入れられた。

弘道さんは毎日、整骨院の午前の診療を終えると病院に向かい、午後の診療時間に間に合うよう帰宅。その後、文子さんは面会時間が終わる午後7時ぎりぎりまで付き添った。

少しずつ体重も増え、00年4月、1歳半になるころには7㎏台に。5月の連休には外泊できそうだった。文子さんは普段日記に「このIV（点滴）取ってあげ少しずつ近くなっている。あともう少し」と書いた。

その翌朝、事故は起きた。

午前8時45分、夜勤明けの担当看護師が内服薬をGリチューブに注入しようとして、誤って点滴用のチューブに入れてしまった。チューブをつなぐ「三方活栓」の形が同じだったため、抗生剤などの薬剤を入れた注射器のはめ込み先を間違えたのだ。

瞬間、笑美ちゃんの右脇がぴくっと動き、看護師はすぐにミスに気づいた。

弘道さんから連絡を受けたのは午前10時過ぎ。自宅近くの量販店で新おむつを買っているときだった。咲き始めた桜内の後を見たながら気べっとと、井出を準備していた。駆けつけた2人に当直医が説明し、「中止しましょう」と頭をさげた。とっさに弘道さんは言った。「看護に助けてください」

笑美ちゃんは医師らに取り囲まれ、酸素投与、心臓マッサージなどの処置を受けていた。午後には公野第二部長―当時―や小児科の教授が改めて説明した。だが、看護へは聞けたものの、会話は聞かない。弘道さんは不信感がわき、「なぜ事故後すぐに知らせてくれなかったのか」という思いも募った。

翌日も家族面会は続いた。心臓マッサージのため、口や鼻から管と点滴が差された状態があふれる。「もうやめて下さい」。弘道さんは叫んだ。午後7時33分、口や鼻に入れられたたくさんの管を「嫌いだったもんね」と主治医が抜いた。文子さんはその手を押さえながら涙を拭いた。

30分後、病院は記者会見で「明らかに自分たちが誤った」「管理もありません」と説明した。後日わかった死因は多臓器不全だった。